造形表現の指導によって構築される教師と生徒の信頼関係の特質
－高等学校芸術科実技科目における教師と生徒のかかわりの分析を通して－

学籍番号219345
氏　　名　　浪花真央
主指導教員　　佐藤賢司
副指導教員　　渡邉美香

１．はじめに

この研究は美術を専門的に学ぶ高等学校の実践を観察・分析するものだが，研究の内容は高等学校の美術教育に限定されるものではない。教師がどのように生徒の作品を受容し，造形表現の指導・支援を通してかかわるべきかを考察するものであり，当然小学校図画工作教育，中学校美術教育にも深く関係するものである。

学校教育が変わっていく中，図画工作科・美術科教育では大きな課題があると感じている。「作品をつくること」，「美術史を学ぶこと」自体が目的であるかのような指導が未だに存在する。 そのような指導の中で，子どもが作品づくりを通して自分自身について考えることや，作品を見て，「上手い・下手」以外のよさを感じ取ることができるだろうか。今や人が描かずとも，AI によって，既存の画家が描いた作品のような画像まで出力できてしまう時代である。しかし，今だからこそ，子どもが材料や作品づくりを通して，世界とかかわる時間の大切さを感じられる機会が，図画工作・美術の時間である。そのような場に立ち会う教師は，子どもとどのように声をかけたり，指導をすることが求められるのだろうか。

本研究は，高等学校美術の造形表現の指導の中で，教師と生徒の信頼関係がどのように育まれているのかを明らかにすることが目的である。観察を通して記録した教師と生徒，生徒同士の会話から分析・考察し，一般化を図る。

２．造形表現の指導と信頼関係

学校での教師と生徒の関係には，〈教える―教えられる〉〈評価する―される〉といった要素があるだろう。そのため，生徒主体に制作するには，教師は支援的にかかわることが望ましい。ただし教師は，生徒の制作に干渉しないようにしたとしても，生徒が自ら納得できる表現をみつけ，作品を完成させることを願っているだろう。作品の完成とは，生徒に作品の完成を目的につくることではない。また，単に成果物として提出できるようにすることでもない。作品が完成したと生徒が感じることが必要であると考えられる。実際に，授業で決

められた時間になったら完成とする生徒もいれば，授業の時間が来たとしても，作品返却後に「足りていない」と感じた部分に手を加える生徒もいる。どの生徒も作品の完成のラインを自分の中に持ち，自分の中で“受け容れられるか”，“満足できるか”が重要なようである。つまり，目指す作品の完成度や完成像などは，常に生徒の側にあるといえる。このような作品制作と生徒の関係を守りながら，教師は声かけや指導を行う必要があると考えられる。

３．まとめと考察

3.1 教師の声かけ・指導の特質

生徒の作品の主題は，作品をつくる中で生まれる。教師がその主題についての話を聴くことや，それを受け容れることは大切である。観察した教師の言動からは，生徒の主題への思いを受け容れる姿勢があると捉えられた。このような姿勢は，作品をつくることが人間にとって根源的な行為であるからこそ，重要だといえる。

作品をつくるということは，常に作者によって予想された行為の連続ではない。制作過程の中で起こる予想外の直感的な何かに，突き動かされることもある。計画の通りに遂行していくものではないのだ。作者の発想をかたちにしていく中で，新たな想像や，解釈が生まれ，意味付けも変わっていくことが，作品をつくることなのではないか。このように考えると，作品をつくることは，ケネス・R・バイテルが“自主的な操舵手”と呼んだような，人間にとって根源的な行為であると考えられるのである。

そうであれば，教師の指導とは，人間の根源的な行為に寄り添い，支えることということになる。だからこそ，たとえ技術的な指導であっても，生徒の内面に深く届くのである。作品制作のなかで起こる気持ちや思いの変化を聴き，それを認め，受け容れることは，すなわち生徒自身を認め，受け容れることである。このように考えると，造形表現における教師の指導は，生徒自身の存在を認めることになると考えられる。

3.2「造形表現の指導を通して」構築される信頼関係についての考察

教師と生徒の観察全体から，生徒主体の作品制作がどれほど尊重されて進められているのかを知ることができた。また，教師と生徒の対話や教師の声かけ，指導には，ロジャーズの理論に通ずる点があることがわかった。そのようなかかわりは，作品と生徒自身が相互に深められていくといった作品制作の性質に関係していると考えられる。

実際の対話は，教師と生徒どちらから始まることもある。ただし，教師はまず生徒の主題や考え，表現したいことを教師は聴いていることがわかった。生徒は，継続的な教師とのかかわりの中で，自分自身を受容され，理解され，尊重される。それらが，自分の主題や考え，表現したいことという自分自身に根付いたことがらを語ることに投影されていく。この継続的なかかわりが，教師と生徒の信頼関係を構築し，作品制作の性質からその特質が生まれていると考えられる。